

観点・小問ごとの分析	対策の視点
<p>く理解されている。(正答率は(1)が75%、(2)が72%、(3)が80%である。)</p>	
<p>三、敬体と常体を使いわけて書く</p> <p>1 常体を敬体に直す問題は、正答率があまりよくない。(正答率42%)「山だ」「なのだ」「なのだろう」などの誤答がみられる。</p> <p>2 敬体を常体に直すのは、64%と正答率がよい。</p> <p>誤答例として「できました」「できなかったのです」「できる」「できないだろうね」などがみられる。</p>	<p>。 児童の書いた作文の中には、6年生になっても文体の誤りが多くみられる。児童ひとりひとりの書いた文章を読んで、敬体・常体の選択のしかたを個別に指導したり、誤用を修正してやる指導をしたりすることが大切である。</p>
<p>四、文を続けて文章をつくる</p> <p>1が50%、2が47%と、どちらも約半数が正答である。まとまった誤答傾向はみられない。無答が他の問題にくらべて比較的多い。</p>	<p>。 完全正答なので、最初の文が正しくつかめていないと答えられない。それには、「しかし」「これは」「そして」などの接続語・指示語をしっかり指導しておくことが大切であろう。</p>
<p>観点⑥(文・文章を書く)について</p> <p>文・文章を書く観点の中で、指示語・接続語の使い方や言葉を続けて文をつくることは、高い正答率を示している(平均正答率78%)が、敬体・常体の使い分けや文を続けて文章をつくることの正答率は比較的低い。(53%、49%)「常体・敬体の使い分け」については、両方の違いを理解させ、書く相手と目的に応じて、作文指導などで使い分けの練習が大切であろう。また、文末だけでなく、文の途中における敬体・常体の違いにも、推敲などの機会をとらえて指導していきたい。</p> <p>文を続けて文章をつくる指導では、指示語・接続語に着目させるとともに、文章の要旨を考えながらつくらせるようにしたい。⑥の正答率は66%である。</p>	

◎ 第6学年 国語についてのまとめ

- 。 「読むこと」と「書くこと」の正答率には、大きな差異は認められない。(正答率読むこと60%、書くこと63%)
- 。 漢字を読む力の正答率にくらべ、対語・類語・語句の組み立てなど、語句について理解力の正答率が低い。(漢字を読む68%、語句理解力59%)今後、読書指導や作文指導の機会に、言語事項の指導系統を押さえ、語句をとりあげて指導するなどして、さらに、児童ひとりひとり